

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391300100		
法人名	社会福祉法人 共生会		
事業所名	グループホーム アミーチ		
所在地	岩手県二戸市以鳥字上平15番地1		
自己評価作成日	平成28年12月15日	評価結果市町村受理日	平成29年5月19日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.nhl.w.go.jp/03/index.php?action=kouhyou_detail_2016_022_kari=true&lgvosvoQd=0391300100-008PefQd=03&VersionQd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益財団法人いきいき岩手支援財団
所在地	岩手県盛岡市本町通三丁目19-1 岩手県福祉総合相談センター内
訪問調査日	平成29年1月19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者が毎日の暮らしの中で、個々のペースで一人ひとりがゆとりのある生活を送れるように側面から支援している。掃除や調理・洗濯物量み等、日常生活と一緒に過ごせる時間を大切に考えている。又、季節感を感じて頂けるように、敷地内の散歩の際には、景色を見ながら会話を楽しみ、季節ごとのイベントにも積極的に参加するようにしている。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人の中に属しているが、自主的な運営を任されている部分もあり、グループホームとしての機能が発揮できるようになっている。例えば、運営理念は職員で考え、職員の書で掲げている。これは事業所内のモチベーションアップにも繋がっていると思われる。職員の話し方や利用者に向ける自然な笑顔は、相互の信頼関係があるからできていると思われる。また、生活の支援では、出来るまで待っているという姿勢が見られるなど、職員の意識が高いことが分かる。外出に関しては、利用者の状態により、複数だったり、一人と買い物に出かけている事で、外に出る刺激と、日常の生活での行動を取り入れるなど工夫が見られる。入浴日は週4日設けており、その間に選択できるようにし、更に午後の入浴時間としているのが自宅での生活に近く、スムーズに運営されている。
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらい 3. 家族の1/3くらい 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらい 3. 職員の1/3くらい 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらい 3. 家族等の1/3くらい 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

〔セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。〕

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	苑内の見やすい場所に掲示しており、職員が日々意識して実践するように努めている。	理念である「ひとりひとりの思いを大切に」は、アミーチ職員の総意で作られ、食堂、談話室の壁に掲げられている。利用者へのケアは、その人に合わせた伝え方をしており、声掛けや耳を傾け傾聴する姿勢が見られた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地元の小・中学校との交流を大切にして、春には運動会・体育祭、秋には学習発表会・文化祭・三世代交流会に声を掛けて頂き、参加している。	昨年度の課題であり、アミーチ独自の実践を心がけている姿勢が見られた。初めて、県立一戸高校の福祉コースの生徒のボランティア活動を受け入れた。生徒からは、「少人数であり、ゆったりとお話や活動ができ満足した」との感想があり、チャンスを活かしながら地域とのつながりを進めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地元の小・中学校との交流を通じて、利用者や触れ合う事により、より身近に感じて頂けるように努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	現状報告・行事報告・アクシデント報告等を行なう事で、運営の様子を知って頂いたうえで、助言や意見を頂き、今後に繋げている。	運営推進会議での委員の発言も多く、その時の対応が簡潔に記録されている。アクシデント報告に対しての客観的な意見等もあり、サービス向上に向けての役割を果たしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に参加して頂く事により、日頃の様子を知って頂いている。その上で、報告に対してのご意見を頂いている。	ケアマネジャーの会議での交流が行われている。相談や報告書の提出等も、電話や文書で済む用事であっても、なるべく窓口に出向いて対面で行うように努め、事業所の事情の理解や相談できる関係作りを心がけている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	会議・研修(内部含み)で理解に努め、身体拘束はもちろんだが、特にスピーチロックに気を付け、職員間で注意しあっている。	スピーチロックに関しては、「待っててね」がどうしてもゼロにならない状況である。行動を抑制する言葉として職員は自覚をし、お互いに注意喚起を続けている。今後もケース検討を行いながら、どんな事があっても身体拘束は行ないという姿勢を持っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	倫理委員会の際に、委員の方が利用者に聞きとりを行い、苦情等を聞く機会を設けている。		

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホームアミーチ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修への参加が出来ておらず、深い理解には至っていないし、活用の対象となる方がいないが、必要に応じて対応出来るように学ぶ機会を設けて行きたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所申込みの際に、施設を見学して頂き概要等についても十分に時間を取り説明をしている。又、施設利用におけるリスク、家族への協力依頼等を説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に意見箱の設置を行っているが、活用される事はないが、面会の際に直接意見要望を聞き出せるように努めている。又、推進会議を通して家族よりご意見を頂く事もある。	日常生活を送る中での要望や意見が出ることもある。これに関しては職員で解決策を出し、利用者、家族に回答している。回答、報告に関しては、起案書を作成していないため、今後の対応を期待したい。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	出来るだけ職員の意見や提案を聞くように努めている。①職場環境の改善の為のアンケート②アミーチ間でアンケートをもとに職員間で話し合いを行った。毎年職場環境改善アンケートを実施するように努めて行く。	今年度より、職員全員を対象に、職場環境改善アンケートを開始した。職員のスキルアップに結び付けるためにアンケート、面談を行っている。来年以降にその成果を期待したい。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職場環境・条件等の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人以外の研修を積極的に参加させるよう努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県北老施協等の研修会・交流会に参加し、サービスの向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	申し込みの際に、ご本人の状態を確認している。入所決定の時点で、ご本人からの確認は難しい為、家族より状態の確認、生活習慣等の聞き取りを行い、早く新たな環境に馴染めるように、関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用希望に至った経緯、困っている事等を十分な時間を掛けて聞き出し、更に、施設利用の際の事も説明している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	申し込みの際に、現状を十分聞きとっている。当施設のサービス内容の説明を行い、納得した上で申し込み頂き、他施設への申し込み等のお話もしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者が出来る事を一緒にに行い、出来ない部分を支援するようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	生活の様子や体調面等、面会の機会や毎月のお便りで報告している。体調の変化等があれば、すぐに電話で報告・相談をし、家族への判断を委ねている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	併設の特養、デイサービス利用の方で知人がいる際には、機会を見て会いに行ったり、来てもらったりしている。地元の小・中学校の行事に参加する事で馴染みの関係を築いている。	利用者の平均年齢が85.3才であるせいか、馴染みの人、場所等への外出の希望はなく、幼なじみの人が亡くなっていることも事実としてある。事業所では、年賀状の作成を行ない、家族等に発送している。地域の行事に参加した時に住民に声をかけられ嬉しそうにしていた。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が声を掛け合い一緒にに行っている。トラブルが起きそうな場合は職員が仲介し防いでいる。孤立しがちな利用者には職員が寄り添っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	併設の特養に住み替えになった際には、支援の内容・注意点等情報提供し、出来る限りこれまでと同じ暮らしが出来るように支援している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の様子、言動について日誌・申し送り・会議で把握するように努めている。失語がある利用者の訴えに気付けるよう仕草・表情に気を掛け対応している。	毎日の申し送り等で、問題にあがった業務についてや、ケアプランの見直しを定例会議(午前中)で行っている。特に業務の見直しについては、施設長が同席している事は解決につながったり、職員のモチベーション向上にもつながっている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人・家族に話を聞き出し、情報収集に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の観察や職員同士の情報交換で日々の状態把握をしている。又、日常生活の中で「出来る事」を見つけ出し、出来る限り継続していけるように支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	会議で見直す機会を作っている。ご本人・家族が望む事を基本に介護計画を作成している。	モニタリングには家族は参加できないが、作成後に報告を行いながら意見やアドバイスを受ける事もある。担当の職員やケアマネジャーによって利用者、家族の望む介護計画を目指している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日誌や連絡ノートを活用し、次の勤務者に申し送りをし、情報の共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	出来る限り、家族の要望(通院・買い物・外出・外泊)に対応出来るようにしている。		

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホームアミーチ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のイベントに参加している為、馴染みの関係が作られ、理解・協力をして頂いている。買物に行くスーパーの方々からも理解いただき協力して頂いている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前からのかかりつけ医を利用し、今まで通りの関係を保てるように支援している。又、受診時には「通院カード」を作成し、状態報告を行っている。	受診時の家族の付き添いは十分にできていて、内服薬だけや、予防注射でも付き添いが出来ている。事業所からは「通院カード」を作成し、家族が受診時に持参して病院との情報共有に役立てられていることが、家族の協力につながっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設の特養の看護師に、利用者に何かあった場合は、報告・相談をし、指示を仰ぎ吸引等医療行為が必要な際には対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際には、2～3日に1回は病院を訪れ、情報交換や利用者の状態の把握に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状態の低下、状態の報告を欠かさず、今後の方向性を確認している。重度化した場合は同法人の特養での対応が出来るようにしている。	事業所内での重度化した場合、法人内の特別養護老人ホームで対応できるようになっており、入所時に利用者、家族の同意を得ている。過去には、家族の泊まり込みの協力を得ながら、事業所で介護したケースがあり、職員の経験につながっている。夜間に、状態悪化した時の職員連絡網等が作成されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故発生時に備えて、各マニュアルを整備しており、職員へ周知している。又、年1回の救命講習を受けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	月1回、火災・地震に備えて、訓練を行っている。内容も火災箇所・時間帯を変えて行っている。又、今年台風被害に伴って、マニュアルの見直しを行い周知している。	台風被害等のマニュアルの見直しが出来上がり、職員に周知されている。ハザードマップを利用したの勉強会等も行っている。事業所内で、消防署員から指導やアドバイスをもらえる機会を作り、今後備える準備をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日常の声掛けに注意を払い、人格の尊重に努めているが、大変難しいと感じる事が多くなっている。	発語がほとんどない、難聴、聞き取りにくい等、意思疎通が取りにくかったり、入居したばかりなどの入居者の思いを汲み取ろうと、職員全員で取り組んでいる。スピーチロック等に注意を配りながら支援している。職員は、申し送りや記録物を読み、情報の共有を行っている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	聞く姿勢を大切にし、利用者が話しやすいような環境・雰囲気作りに努めている。又、出来る限り選択肢を増やす等の工夫をしている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者のペースに合わせて、待つ事を心掛けている。又、運動レクやアクティビティなども無理に押し付けないようにし、本人の意思を大切にしている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節に応じたの衣替え等に気を配っている。理容に関しては、月1回市内の理容協会の方々が散髪を行ってくれる他、近くの馴染みの美容室も利用している。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	なるべく旬の物を取り入れて提供している。買物・下準備・盛り付け・配膳・後片付けを職員と一緒にしている。調理への参加は難しい為、味付けの確認をしてもらっている。	食材の買い物は、利用者と一緒にしている。昼食は、別棟の特別養護老人ホームと同じ食事を事業所内で摂取している。朝、夕は職員の準備した食事を一緒に食べている。仲の良い3人が会話をしながらの様子がほほえましかった。食材も、食べやすいように工夫されている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの状態に合わせて、食事形態を調整して提供している。又、水分量をチェックし、摂取量の少ない方へは少しずつ数回に分けて対応している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを行い、出来る方は見守り・声掛けを行ない、出来ない方は介助を行っている。夕食後のうがいは、緑茶を使用している。口腔内状態の把握と観察を行い、異常の早期発見に努めている。			

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホームアミーチ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し、一人ひとりパターンを把握し、使用パットとパンツ・リハビリパンツを昼夜使い分けている。尿意のない方は時間を見計らってトイレで排泄できるように支援している。	完全オムツの利用者はゼロであり、排泄チェック表が活用されており、快適な生活を支援している。トイレにオムツ、尿取りパットを置いてあるのはとても有効と思われる。失敗の時も、さりげなくトイレや更衣に誘導されていて、不安や羞恥心への配慮がされている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳やリンゴ・冷水を摂取し、日々の家事や掃除、レク等で運動の機会を持っている。便秘がちな方には水分を多く摂ってもらったり、下剤を調整したりして対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は午後としており、週4日の入浴日を設けている。拒否があった場合は、時間をずらしたり、本人の状況の変化に合わせて対応している。体調不良時は清拭を行っている。	入浴日を週4日としていて、一人2回以上は入浴できている。更衣場と洗い場には、床暖房が設置されていて喜ばれている。入浴時間を午後としているのも、生活のサイクルにあわせ、業務運営上も支障がなく行っている。入浴をしない時の記録も検討されたい。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝・起床時間は個々に応じて支援している。日中は和室や居室・談話室等、好きな場所で自由に過ごしている。冬は湯たんぽを使用して安眠できるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の理解が出来るように、情報をファイルに綴じ、何時でも確認出来るようにしている。利用者の状態に変化があった場合や薬の変更があった場合は、記録と申し送りでも共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事や畑等出来る、出来ないの見極めをしながら支援している。習字や塗り絵等の作品を作ってもらい、毎月掲示物を替えている。又、畑があり、野菜や果物の栽培、収穫を体感して頂いている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節により、出来るだけドライブや散歩、買物やイベント等に出掛けられるようにしている。又、天気の良い日は、敷地内の散歩を行い、景色を見ながら季節を感じてもらえるような会話に気を配っている。	外出支援は、職員との食材の買い物の外出が一番多く、事業所のスケジュールで把握されている。自立している利用者は、希望して出かけている。お盆、年末年始の外出に関しては、家族の協力で実現しているが、利用者が積極的に希望しない状況でもあり、事業所での行事に合わせた支援が多くなってきている。	

岩手県 認知症対応型共同生活介護 グループホームアミーチ

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	施設の金庫で管理し、必要な物等、各自利用者の担当職員が購入している。家族への確認が必要な場合は連絡し了承を得てから購入している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	担当職員が、毎月家族へ体調や様子等をお便りしている。本人より希望があれば、その都度対応している。又、毎年家族へ年賀状を出している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂や談話室は広くゆっくりとした空間がある。和室や廊下には毎月の習字やちぎり絵等利用者の作品を飾っている。	食堂、談話室は回廊となっていて、閉塞感がなく、また外出傾向の利用者が出て安全に見守ることができるようになっている。畳敷きのスペースが広めにあり、休息や行事等に活用されていて、家庭的な雰囲気を出している。食堂、談話室は、利用者が全員でほうきを持ち、清掃している姿が家庭での姿であり、居心地のよさが見られた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	談話室と和室にそれぞれテレビがあり、1人で過ごしたり、気の合う利用者同士で過ごしたりしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使い慣れた物を持参し、馴染みの空間を作っている。花を飾ったり写真を飾ったりして、居場所作りに努めている。	持ち込みが少なく、スッキリと整理整頓されている。利用者のスナップ写真や作品がボードに飾られている。短いのれんで私的空間と共有空間を分けているがほとんど解放のままであり、共有空間からの暖房効果もある。また、のれんは防災加工品であり、消防の許可も出ている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室や廊下等、手すりがあり安全に歩行が出来るようになっている。トイレ内にも入った際に電気が点く、場所が分かるよう、案内も出ている間違える事のない様にしている。		